
2014年国際公文書館会議に出席して

国立公文書館 理事

齋藤 敦 さいとう・あつし

1. はじめに

2014年10月11日から18日まで、スペインのジローナで開かれた国際公文書館会議（ICA）年次会合に出席し、併せて帰国途上にイギリス国立公文書館（TNA）を視察した。

私にとって、一昨年6月末に理事に就任して以来、諸外国における公文書館の実際に触れる初めての機会となった。

昨今、日本における公文書館の役割、あるいは行政の公文書管理について、国内でも関心の高まりがみられるところであるが、外国の国立公文書館を実地に見学し、また、公文書の専門家やトップマネジャーと意見交換を行う機会を得て、たいへん学ぶことが多かった。国内で議論されている視点については、正に諸外国においても長年議論され、あるいは近年課題として認識された共通のものもあれば、日本で論じられていることのそもそも土台にある部分が十分認識されていなかったのではないかと改めて気付かされるものもあったように思う。

その意味でも、これからの日本の公文書館や公文書管理の在り方を検討する上で、ICAでの国際的な議論の動向などを十分に参照するとともに、日本自身もICAなどの場で日本の情報を発信して、議論に積極的に貢献していくことが重要であるとの認識を新たにされた次第である。

2. 国立公文書館長フォーラム

10月12日ICA年次会合の開催に先立ち、国立公文書館長フォーラム（FAN）が開催された。FANはICA年次会合が全会員参加の会合となったのに

伴い、各国の国立公文書館会員の忌憚のない意見交換の場として2012年に設置されたものであり、ICAの執行委員会に参加していない国にとってICAの執行部の動向や問題意識を知ることのできる貴重な会合となっている。

まず、今年の活動状況と当日午前に行われた執行委員会の報告が行われた後、FANがどのような活動を行うべきかについての討議が行われた。議論の前提として、アーカイブズ・レコードマネジメントが社会のアイデンティティや遺産として重要であるとともに、民主主義の土台として透明性・説明責任を確実なものとするために重要な使命を持つものであることが改めて共有され、民主主義の基盤として政策意思決定者に対する影響力を発揮するための戦略、新しいテクノロジーの利用、アーカイブズ専門家の専門性を高める能力開発、などが議論された。それを達成するためのロビー活動やアーカイブズ関連分野の専門家のネットワークの構築を主唱する活動をFANが自ら行うとの見解が示された。

また、FANでは国際アーカイブズ開発基金（FIDA）の活動状況やオーストラリア国立公文書館（NAA）からの情報公開に関する経験の報告などの6つのプレゼンテーションが行われた。

このうち、オーストラリアからのプレゼンテーションでは、公文書に対するアクセスを従来原則30年後公開であったものを20年後に短縮するプロセスを実施中であるが、非開示情報を解除して公開するための決定に90日以上を要していたものを改善するためのチームを編成して事務の効率化を図ったことなどが報告された。

また、カナダからは、「忘れられる権利」に関連

して、カナダ先住民の子弟に対するキリスト教寄宿学校への強制入学・同化教育政策に関する記録の扱いについて、個人情報保護と公衆の記憶の価値との深刻な相克が現れていることが報告された。

なお、FANの議長であるオーストラリア国立公文書館長D・フリッカーがICA会長に選出されたことに伴い、FANの議長に新たにシンガポール国立公文書館長E・チンが選出された。

3. 年次会合

3.1 アーカイブズと文化産業

今年の年次会合は、スペインのバルセロナから新幹線で約40分程のジローナ市で行われた。ジローナ市はカタルーニャ州の人口10万人足らずの地方都市であり、カタルーニャ州は独自の言語・文化を有していることもあり、今回年次会合では、英仏語に加えてスペイン語とカタルーニャ語の発表も数多く行われるなどローカル色豊かなものになった。

統一テーマも「アーカイブズと文化産業」とされ、欧州アーカイブズ会議及び画像研究セミナーと同時開催され、約90の国・地域から900人以上の参加者を得て行われた。ヨーロッパ各国の問題意識が色濃く反映された年次会合だったともいえる。それは、ヨーロッパの伝統と遺産を各国・地域の経済振興にどのように生かしていくか、ということにある。

ヨーロッパの伝統遺産を保存し、これを多様な用途に利用できるように提供する役割こそアーカイブズであるとの認識である。このため、アーカイブズのデジタル化が要請されることになる。アーカイブズの内容もその利用の用途も、行政資料に限らずさまざまであり、このため、今回のプログラムには、有名レストランのオーナーシェフや番組制作者、また、古楽器の演奏者・音楽学者など多彩な顔ぶれのゲスト・スピーカーが並ぶこととなった。

開会に当たっては、オランダ国立公文書館長であるM・ベレンズ会長の挨拶に続き、主催地地元

のカタルーニャ州文化省、ジローナ市長からも歓迎の挨拶が行われた。今回の年次会合は、ジローナ市などの地元の多大な後援と協力の下に行われた模様である。開催期間中、市内の大聖堂・博物館などの文化施設の入場料が会議参加者には無料となるなど市を挙げてのイベントとなった。折しも、スペイン国内政治のトピックとしてカタルーニャ州の独立の是非を問う住民投票の実施が話題となっていた時期に当たり、ジローナ市内にもアパートの窓からカタルーニャ州の旗を掲げた家々も散見されたが、市内は至って平穏で政治集会やデモなどを目にする事はなかった。

今回の年次会合の基調となる問題意識は、カタルーニャからの次のようなあいさつの中に集約的に現れていたように思われる。すなわち、カタルーニャは歴史あるデモクラティック・アイデンティティを有し、その中でアーカイブズが重要な役割を果たす。将来に向け、我々がどこに向かっているのかを明らかにするために、過去の記録が意味を持つ。今起こっていることはやがて落ち着くところがある。その時起こったことの記録が英知となり、アイデンティティとなり、我々の誇りとなる。クリエイティブ産業は記憶を素に、外に向かっていく。写真産業に新たなコンテンツを加える。それらの相互作用の中から文化産業が生まれる。社会的な危機においても、それは社会の内面を形作る力がある。文化の権利を守り、我々がどこからきてどこに向かうのかを示す力のある記憶の装



懇親会にて、D・リーチICA事務局長との意見交換

置—それがアーカイブズである。そして、それが我々の文化産業に対するたいへんな助けになる。

3.2 様々なプレゼンテーション

この「アーカイブズと文化産業」というテーマの下、10月13日から3日間にわたり、250に及ぶ発表が行われた。

基調講演のトップを飾ったのは、ジローナの著名なレストラン「エル・セリュー・ドウ・カン・ロカ」のオーナーシェフ、J・ロカ氏であった。

ロカ氏によれば、新しい料理のクリエイティビティの出発点には「記憶」がある。例えば、子供のころ食べたカンパリ・ボンボンの味。そういう記憶に訴えることでお客の心を動かすことができる。そして、どのような味も長くは続かない。記憶をとどめる装置としての記録、アーカイブズの重要性がある。そこには今まで作った料理の記録、ワインリスト、メディアの記事、ライブラリー、文献等も含まれる。自然の景観と自然の恵みもまたアーカイブズである。その中から、かつて食されていたが現在は使われていないユーカリを発見し、過冷却水の原理を応用して客の目の前で一瞬にして凍る氷菓が生まれた。新しいテクニックを活用し、新しいアイディアの刺激を求めて、世界と交流し、そして故郷に帰る、これが私の考え方である。アーカイブズにより人々の記憶が共有される。

3.3 デジタル化とクリエイティブ産業

ヨーロッパのクリエイティブ産業をどのように振興するか、という観点での発表はいくつものセッションで繰り返し、様々な立場から行われた。

とりわけ、アーカイブズのデジタル化により、クリエイティブ産業への活用につき、新たなチャンスと新しい課題が生まれているというのが、共通認識となっていた。

すなわち、デジタル化により、コンテンツの利用の可能性が広がり、新たなカルチャーの新しい革新の可能性が高まっていること、デジタル・コンテンツの創造が容易になってヨーロッパのクリ

エイティブ産業の振興に新たな可能性が広がっている点が指摘されるとともに、新しいビジネスモデルの構築やその法的ベース、その資金調達などに課題がまだ残されていることも指摘された。いずれにおいても、ビジネスをサポートするのもアーキビストの仕事との認識が強かったのが印象に残った。

アーカイブズのデジタル化は、クリエイティブ産業の振興は別としても、各国において共通に関心が高いテーマで、各国・地域から様々な観点からの発表が行われた。デジタル化は、ICTの普及と相まって、アーカイブズの利用において“Archives in your living room”という標語で表すことのできるような状態が生まれつつある一方、データの信頼性の確保、どのような情報をデジタル化して利用可能とするのか、センシティブ情報の扱いをどうするか、保存・利用のプラットフォームをどう構築するか、その資金をどう調達するか、等々の新しい課題が山積しており、各国とも試行錯誤を繰り返しながら、この課題に格闘している現状がみえた。

そのほかにも、ストックホルム市における市民民主主義を支えるものとしてのオープンデータの試み、ヨーロッパのマイノリティ問題の現状把握と解決に向けたデータの活用とNGOとの協働の試み、韓国におけるデジタル・アーカイブズによる歴史教育教材の開発の試みなど、多数の興味深い発表が行われた。

アーカイブズのデジタル化を取り上げた全体会合においては、ベレンズ会長から、ユネスコによるPERSISTプロジェクトの紹介がなされた。これは、ユネスコ「世界の記憶」プロジェクト20周年記念国際会議で採択されたアナログ資料のデジタル化と長期保存に関する「バンクーバー宣言」を受けて始められたものである。ユネスコは人類の知的社会を持続可能なものとするため、ドキュメントのデジタル保存に関する国際標準をモニターし各国に国際協力を求め、各国レベルでの実行を促すものである。このようなユネスコの提唱に基づき、ICAではドキュメントの長期保存に向けた



ユネスコPERSISTプロジェクトについての発表

課題について、ベンダー等との技術的な検討を進めるとともに、今後はさらに技術だけではなく経済的課題にも取り組むことなどが議論された。デジタル時代におけるアーキビストの責任として、アクセシビリティとアベイラビリティ、そしてオリジナルの価値の確保が指摘された。

その意味で、日本における国立公文書館デジタルアーカイブとアジア歴史資料センターによる取組は、世界の潮流に決して遅れるものではなく、先進的な試みの一つといえるものとの自信を深めたところである。しかし、クリエイティブ産業の振興などの観点は、日本では顧みられることが少ないことも理解できた。

3.4 デジタル化と民間パートナーシップ

アーカイブズのデジタル化の中で、イギリス国立公文書館（TNA）の試みは、たいへんユニークなものであったので、ここに紹介したい。

イギリスにおいても、アーカイブズの文化は保守的なものであったが、デジタル化の導入とともに大きく変化しつつあることが報告された。そして、民間セクターのパートナーとの協働が行われるようになった。

具体的には、膨大なセンサス（国勢調査）の個別データのデジタル化が民間企業によって行われ、民間企業から有料で一般に提供されている。

このこと背景には、ヨーロッパなど多くの国において一般的に個人の家族の歴史、ファミリーヒストリーを調べる時の情報源として各国の国立

公文書館の所蔵資料が重要な役割を果たしているということがある。別の機会にTNAに伺った折には、そのような利用は、一般の公文書館利用の約6～7割を占めているとのことであった。ファミリーヒストリー調べが、各国の国立公文書館を一般国民に親しみのあるものにする重要な契機となっているのである。

そのような背景事情を理解しておいてみると、センサス・データのデジタル化は、自然な一歩の前進ととらえることができそうである。

しかし、もちろん、個人情報の保護やセンシティブ情報の扱いなど非常に扱いが難しい課題を抱えながらの運用であることには間違いない。基本的には生きている人の情報は公開しない、生死不明な場合は100年の寿命を想定する、といった原則の下に行われているとのことであった。

後日、ロンドンのTNAを訪問しJ・ジェイムズ館長と意見交換をした折に、この辺の事情について、特に民間企業からの有料情報提供サービスを許していることに異論はないのか尋ねてみたところ、もちろん、反対意見はあった、しかし、TNAに直接訪ねてくる者に対しては、TNAから無料で情報を提供することによりバランスをとっている、民間企業を活用することにより、膨大なセンサス個別データのデジタル化経費を捻出していることへの理解は進んだ、とのことである。目下の悩みは、民間に対して売り物になりそうな資料のデジタル化から進めたので、この次にデジタル化する資料の選択が難しいことだ、とのことであった。

4. 通常総会

ICAの様々なセッションの合間14日夕刻に、ICA通常総会が開催された。冒頭、会長が、ベレンズ・オランダ国立公文書館長からフリッカー・オーストラリア国立公文書館長に交代し、フリッカー新会長の議長の下で、議事は進められた。

議事は、会長報告、財務報告等と内部規則の改正等の承認事項が主たるものであるが、今回は年次会合開催地選定手続の改正等が諮られいずれも承認された。また、各国分担金の案も諮られ可決さ

れた。この中で、日本の分担金は2015年は前年同額であるが、2016年以降36,000ユーロに減額されることとなった。

最後に2015年の年次会合がアイスランドのレイキャビクで9月に開催されることが発表され、アイスランドからのプレゼンテーションが行われるとともに、2016年の大会開催地である韓国から「アーカイブズ、調和、友情」をテーマとするソウル大会のプレゼンテーションがあった。

5. おわりに

今回の会合への出席は、各国がデジタル時代のアーカイブズとアーキビスト像を模索している現状を知る貴重な機会となった。強く印象に残ったのは、繰り返しになるが、アーカイブズが民主主義を支える知的インフラとして認識されると同時に、社会のアイデンティティを保存し、将来の羅

針盤として機能する記憶の装置であること、アーキビストは記録の保存だけでなくその活用にも大きな責任を求められるようになったとの共通認識が確認されたことであった。

帰途立ち寄って視察したTNAにおいては、人材養成や文書の移管・公開などについて、貴重な話を伺うことができたが、その紹介は別の機会にゆずることとしたい。



14日晩に開催された夕食会（写真は主催者提供）

ICA年次会合ジローナ2014プログラム

10月13日(月)				
09:00-09:30	開会式			
09:30-10:00	Joan Roca「アーカイブズ、創造と卓越性」			
10:30-11:30	Ancestry: 現代及び21世紀におけるデジタル協力モデルを通じた価値の付加 司会: Todd Godfrey, Nikolai Donitzky 発表者: Laurence Ward, Harald Stockert, Joachim Kemper			
11:30-13:00	分科会「文化及びクリエイティブ産業とアーカイブズとの協働戦略」 司会: Trudy H. Peterson ・Gary Thorp, Catt Baum「守り、可能ならしめる: 国立公文書館の開設」 ・Agnès Magnien, Françoise Lemaire, Anne Rousseau「都市開発アクターとしてのフランス国立文書館」 ・Caroline Kimbell「1939年国勢調査のデジタル化: 商業的パートナーシップとデータへのアクセス」	分科会「行動及びイニシアチブ」 司会: Ramon Alberch ・Lennart Ploom, Mats Hayen「都市のイメージ: スtockホルム市の世界記憶遺産指定の市場可能性に関する内部の視点」 ・Christoph Sonnlechner, Hannes Tauber「ウィーン市のセマンティック・メディアウィキ構築」 ・Ashley Todd-Diaz, Earl Givens, Jr.「拡張現実における資料のあり方」	分科会「行動及びイニシアチブ」 司会: Hellen Walker ・Peer Boselie「シタルトのロバ: いかんにして楽しみながら街の歴史を築くか」 ・Maggie Shapley「アーカイブズのアクセスに関する原則の実施: 課題と機会」 ・David Hay「新たな繋がり: BTデジタルアーカイブ・プロジェクト」 ・Werner Matt「見ざる都市: 都市における調査と観察」	分科会「写真の発明175周年」 司会: Karel Welle ・Sandrine Bula「フランスにおける写真と写真家の175年の歴史: 国立文書館所蔵品の保存とコミュニケーションのための新手法」 ・Jessica Bushey「ソーシャルメディア・プラットフォームでアクセス及び格納されるデジタル写真の信頼性に関する調査の初期の研究結果」 ・Gabriel Betancor Quintana「カナリア諸島における写真の175年。グラン・カナリア島: 写真遺産管理の15年。1999-2014」
	ワークショップ 情報の全ライフサイクルの管理—デジタル保存と記録管理の統合 Preservica	分科会「その他」 司会: Miriam Nisbet ・Cara Bertram「デジタル時代の司書の歴史の保存: アメリカ図書館協会機関リポジトリの開発」 ・Christopher Fryer, Adrian Brown「クラウドにおける持続可能なデジタル保存の実現」 ・Ji-Hye Park「電子記録のオフライン移管に対するデジタル科学捜査の応用」 ・Jason Pierson「一日40テラバイトを保存する—社内に、クラウド上に、あるいは両方に?」	ポスター発表 ・Kim Scott「救護に赴くアーキビスト: モノ資料の保存のためのサポート体制の構築」 ・Anna Fors, Noemí Maya, Miquel Àngel Pintanel「カタルーニャ州フィルム図書館リポジトリ: 様々な背景グラフィックスやドキュメンタリーの一元管理」 ・Anna Sobczak「アーカイブズ科学のポーランド語書誌目録の構築」	
14:00-15:30	分科会「文化及びクリエイティブ産業とアーカイブズとの協働戦略」 司会: Joaquim Borràs ・Fred van Kan「オランダ・ファッションアーカイブズの保存: ファッション・ネットワーク・アーネム」 ・Jorge Núñez Chávez「アーカイブズが行う文化産業及びクリエイティブ産業との協働」 ・Jaume Enric Zamora I Escala, Josep Conejo Muntada「地方文書館と文化産業の関係にみる光と陰」	分科会「行動及びイニシアチブ」 司会: Bernardo Riego ・Antonella Fresa, Borje Justrell, Claudio Prandoni「未来のメモリー標準PREFORMA」 ・Enric Cobo i Barri, Joan Gumbert Ribot「遺産の引受人: 学習用テクノロジーを用いた遺産のための総合的な活動」 ・Alfonso Gutiérrez Escera, Sergi Griño Vilardebo「CEPIC画像検索システム」	分科会「写真の発明175周年」 司会: Fina Solà ・Juan Alonso Fernández, Aleix Purcet i Gregori「ファシズム、戦争と写真: 新しいスペインの姿」 ・Julia de Mowbray「世界的なオンライン写真アーカイブの構築とその課題」 ・Frederik Truyen, Antonella Fresa「ヨーロッパ写真プロジェクト: 1839-1939の特別に許された目撃者としての写真」 ・Darcinele Sena Rezende; André Porto Ancona López「国際標準に照らした写真文書のアーカイブズ記述の妥当性」	分科会「アーカイブズとウェブポータル」 司会: Du Mei ・Koit Saarevet, Gristel Ramler「アーカイブズ記述2.0」 ・Sam Habibi Minelli, Maria Teresa Natale, Paolo Ongaro「MOVIO: アーカイブズと文化的機関のためのセマンティックなコンテンツ管理及び価格安定アプローチ」 ・Hrvoje Stancic, Boris Herceg, Arian Rajh「複雑な電子記録を保存するデジタルアーカイブの内部構造及び機能の比較分析」
	ワークショップ 理論から実践へ—完全な「追加設定不要型」のデジタル保存システムの実現 Preservica	分科会「その他」 司会: Karen Anderson ・Bettina Wischhöfer「Archion—教会記録のインターネットポータル」 ・Jeong Kwag「アーカイブズの新しい使命: アーカイブズ資料を用いた視覚教材の開発に関する韓国の事例」 ・Wojciech Wozniak「ポーランドのアーカイブズへようこそ: www.szukajwarchiwach.pl (archivesearch.pl)のデジタル資源」 ・Ivan Komitski, Milena Petkova-Encheva「社会的アーカイブズ? アーカイブズ用プラットフォーム—手法と課題」		ポスター発表 ・José Antonio Olvera Cañazares「デジタル保存: コンピュータ知能からの新アプローチ」 ・Pepita Raventós, Eva Roca「デジタルアーカイブ: 長期保存の例—スペインの大学アーカイブズの現状」
16:00-16:30	・Joan Soler (カタルーニャ州アーキビスト協会)「アーカイブズと産業: カタルーニャにおける機会と実物投資」			
16:30-17:00	・Yael Hersonki「失われたルールと実体なき現実」			
17:30-19:30	・Martin Berendse (ICA会長) PERSISTプロジェクトとデジタル保存促進におけるユネスコの役割 司会: David Fricker (ICA次期会長) 背景報告書: 3つのアプローチ 1 Iskra Panevska (ユネスコ記憶遺産上席プログラム専門家)「持続可能な情報社会のまとめ役としてのユネスコ」 2 Natasa Milic-Frayling (マイクロソフト・リサーチ)「持続可能なコンピューター使用—デジタル保存の一手法として」 3 Jos van den Oever (KO GmbH社/オランダ内務・王国政務省)「ハードウェアやソフトウェアを超えて」 4 Kuldar Aas, Zoltán Szatucsek「Horizon2020が提案するオープンフォーマットレジストリ」			

10月14日(火)				
09:00-09:30	過去の将来像 Miguel-Anxo Murado			
09:30-10:00	歴史的知見と現代的創造 Albert Garcia Espuche			
10:00-10:20	協働の一事例 Wayne J. Metcalfe (Family Search) (EN)			
10:50-12:20	分科会「情報へのアクセス」 司会: Joan Soler ・Teresa Cardellach Giménez, Marta Munuera Bermejo「真正性の起源: 入国記録のデジタル化と電子文書証明」 ・Xiaomi An, Bin Zhang, Xiaoyu Huang「中国公共部門ネットワークにおける包括的な個人情報保護体制の構築」 ・Jason R. Baron, Anne Thurston「米国立公文書記録管理院長の2019年に向けた政府記録の管理に関する指令に学ぶべきこと、及び低資源国への適用可能性」	分科会「デジタルリポジトリとクラウド上の保存における真正性」 司会: Enric Cobo ・Jan Dalsten Sørensen「スタンドアロン型の保存から機関横断的な協力へ」 ・Jens Boel, Elaine Goh, Corinne Rogers「国際組織における記録管理のためのクラウド利用」 ・Robert McLelland「クラウドサービス・プロバイダーとクライアント間の合意事項: 契約条件の再検討」 ・Joseph Tennis「クラウドにおける真正性の伝統: メタデータ、記述、そしてドキュメンテーションの議論」	分科会「オープンデータのプロジェクト」 司会: James Lowry ・Elizabeth Shepherd「記録管理はどのような価値を政府の行政データにもたらすのか」 ・Gabriella Ivacs「なぜビッグデータはグッド・ガバナンス(良き統治)と記録管理の基本的論点となったのか」 ・Marcel Watelet「文化遺産とクリエイティブ産業: 新たな機会と課題」	分科会「行動及びイニシアチブ」 司会: Vitor Mowlac ・Sandy Ramos「アリアドネの糸: デジタル時代におけるドキュメンタリー遺産を評価する—カナダ国立図書館公文書館の事例」 ・Michael Luetgen「オープンソース製品Goobiによるデジタル化支援」 ・Anahi Rocha Silva, Maria José Vicentini Jorente, Natalia Nakano「デジタル文化地図の作成: 情報管理におけるアーキビストの役割」
	分科会「ICA」 プログラム委員会(PCOM)のプロジェクトについて 司会: Henri Zuber ・はじめに ・Nancy McGovern, James Lowry「インターナショナル・レコード・マネジメント・トラスト/ICA 低資源環境におけるデジタル保存: 中核的計画」 ・アフリカ戦略 ・若手専門家の育成 ・Milovan Mistic「MAST—携帯電話からモバイル・アーカイビングへ」 ・プロジェクトの総括	分科会「写真その他」 司会: Stephen Fletcher ・Karl-Peter Ellerbrock「ヴェストファーレンにおける産業写真: ワールドワイドウェブと伝統的な保存法のためのデジタル化戦略」 ・Charles Farrugia, Ian Ellis「リチャード・エリス・アーカイブ: マルタ及び写真界のランドマーク」 ・Nora Mathys「写真出版アーカイブズ. 写真史の新次元」 ・Bente Jensen「写真アーカイブにおけるインスタグラム—ソーシャルメディアを用いたキュレーション、参加とドキュメンテーション」 ・Patricia Whatley, Leonard Forman「ビート写真コレクションと協力関係の力」	ポスター発表 ・Anna Bonfill, Quim Roca「カタルーニャ州ガローチャ郡画像検索アーカイブ」 ・Antoni Bover, Miquel Bigas, David Sánchez「Vic Invisibleプロジェクト: 歴史的画像の展示手法の提案」	
12:20-13:20	分科会「情報へのアクセス」 司会: Miquel Casademont ・Ramon Alberch, Alfred Mauri, Anahí Casadesús「ESAGEDのISO30301認証: 先駆的な構想」 ・Julio Quilez Mata「GOAL(地方政府の開かれた運営): 法人向け文書管理アプリケーション・サービス」 ・Lluís Cermeno, Maria Teresa Ferrer「カタルーニャ州における情報へのアクセスの実施状況: 国家アクセス・評価選別委員会の役割」	分科会「デジタルリポジトリとクラウド上の保存における真正性」 司会: Dolors Visa ・Gillian Oliver「クラウドにおけるデジタル保存」 ・Alejandro Delgado-Gómez, Daniel Guirao-García, Óscar González-Jiménez「カルタヘナ市のOASモデルの代替デジタル・リポジトリ」 ・Alessandro Alfieri「『伊エミリア—ローマ州アーカイブズセンター(ParEr)』におけるデジタル文書保存のためのモデルと経験: 保健関係文書の事例」	分科会「オープンデータのプロジェクト」 司会: David Fricker ・Karen Anderson, Tove Engvall, Elisabeth Klett「アーカイブによるオープンデータ: アーキビストの新しい役割」 ・Carolina Oliveira「ブラジル政府のオープンデータ計画: 事例研究」 ・Jean-Luc Cochard「オープンデータのための開かれたアーカイブズ—スイスの事例」	分科会「写真の発明175周年」 司会: Patricia Whatley ・Maria Mata Caravaca, Hilke Arijns, Aparna Tandon「学習とネットワーク構築: 視覚コレクションの保存計画策定」 ・Mehmet Fahri Furat, Ishak Keskin「(もう一つの) 力の探求. オスマン帝国の写真記録」 ・Barbara Mathe「これらは誰の写真なのか? 先住民コミュニティのアクセスとデジタルアーカイブの管理」
	ワークショップ: 効率的なデジタル保存—紙からワンクリックでの保存へ Libnova	分科会「ICA」 ・Sarah Tyacke「国際アーカイブズ開発基金(FIDA)について」 ・Giulia Barrera, Trudy Peterson「『人権支援におけるアーキビストの役割に関する基本原則』草案についての公開フォーラム」	分科会「その他」 司会: Patricia Lloveras ・Beatriz Kushnir「現在進行中のバーチャル・データベースファイルの構築における技術革新と課題」 ・Maria Jesús Llaveró, Robert Porta, Mónica Sesma「情報サービス—知識の効果」 ・Francisca Amorós Vidal「『時代の編集者』: デジタルアーカイブ公開プロジェクトがもたらすもの」 ・Pedro Alberto Larrègle Gilabert「ラテンアメリカにおける独裁を抑えるアーカイブズへのアクセス及び組織に関するプロジェクト」	ポスター発表 ・Hsiao Wen Yang, Hsiu Fen Lien「台湾における政府の記録及びアーカイブ情報の統合型検索サービス」 ・Anna Santi「建築遺産の知識を育み深めるためのデジタルアーカイブ」

10月14日(火)				
14:50-16:20	分科会「アーカイブズとウェブポータル」 司会: Xon Colomer •Pierre Fluckiger, Anouk Dunant Gonzenbach「歴史的データの土地情報システム(SIT/GIS)への統合」 •Yves Niederhäuser「メモリアブとmemobase.ch—視聴覚資料の保存ネットワーク兼アクセスプラットフォーム」 •Marina Marchall, Jean-Philippe Legois「学生又はいかにかして学生の論文というデジタル資源を見つけやすくするか」	分科会「アーカイブズとウェブポータル」 司会: Jordi Serchs •Gabriel Betancor Quintana「カナリア諸島における写真の175年。グラン・カナリア島:写真遺産管理の15年。1999-2014」 •Darcinele Sena Rezende; André Porto Ancona López「国際標準に照らした写真文書のアーカイブズ記述の妥当性」 •Kerstin Arnold, Karin Bredenberg, Silke Jagodzinski「アーカイブズポータル・ヨーロッパ—調和とアウトリーチの課題」	分科会「情報へのアクセス」 司会: Xavier Tarraubella •Norma Catalina Fenoglio「評価と文書遺産:必要な関係」 •Anabella Barroso Arahuetes「21世紀の情報管理と情報アクセス性の向上:アーカイブズ翻訳センターからの提言」 •Marta Alexandra Lourenço, Pedro Penteado「ポルトガルの公的情報へのアクセス及びその再利用の向上策:セマンティックな相互運用性の役割」 •Juliana Fachin, Ursula Blattmann, Eliana Maria dos Santos「国立公文書館の情報へのアクセス」	分科会「ICA」 司会: Fred van Kan •Claude Roberto「SPAの世界的アドボカシー計画」 •Talei Masters, Helen Walker, Amela Silipa「ヘ・ワカ・エケ・ノア—我々全員が乗り込んでいるカヌー」
	分科会 書籍の紹介:「イメージの紡ぎ手:視聴覚・写真遺産の研究及び管理に関する方法論的提言」 著者:Lourdes Roca, Felipe Morales, Carlos Hernández, Andrew Green 発表者:Zenaida Osorio, André Porto Ancona	分科会「デジタルポジトリとクラウド上の保存における真正性」 司会: Deborah Jenkins •Miguel Coutada, Hélder Silva, José Carlos Ramalho「データベース保存ツールキット」 •Kuldar Aas, Janet Delve, Karin Bredenberg「記録システムとデジタルアーカイブの統合—現状と今後の方向性」 •Maïté Braud, Pauline Sinclair, Robert Sharpe「リンクドデータ・レジストリ:技術レジストリの新アプローチ」	分科会「デジタルポジトリとクラウド上の保存における真正性」 司会: Caroline Kimbell •Catherine Williams「芸術のアーカイビング:アーカイブズの支援、芸術の支援」 •Nancy Hovingh「メモリー・パレス:独特かつ革新的な資料の展示手法」 •Trilce Navarrete「開かれたデジタルアーカイブの利益を測る」	
10月15日(水)				
09:00-09:30	•Joan Fontcuberta「アーカイブズ:アリババの洞窟」			
09:30-10:00	•Jordi Savall「創生の手法:情報源の調和」			
10:30-12:00	分科会「デジタル保存と保管のためのビジネスモデル」 司会: David Fricker •Tarvo Kärberg, Tiit Kravtsev, Ülle Mägin「資料作成者と公文書館を繋ぐ—熱意と現実」 •Jordi Serra Serra「コンサルタント業とアーキビストの新しい商機としてのデジタル保存政策及び学習プログラムの事例」 •Charles Dollar, Lori Ashley, Milovan Mistic「能力成熟度モデルを用いたデジタル保存のビジネス事例の構築」	分科会「アーカイブズとウェブポータル」 司会: Vicenç Ruiz •Claire Sibille de Grimotard, Alice Motte「アーカイブズとリンクドデータ:我々のツールはいつでも『絵を完成させる』ことができるのか?二つの事例研究」 •Sarah Higgins, Christopher Hilton, Lyn Dafis「資料コンテキストと発見:デジタル時代における整理と記述の再考」 •Gavan McCarthy「コミュニティのニーズに応えるためのアーカイブズの強化:オーストラリアのウェブ資源『Find and Connect』」	分科会「アーカイブズとウェブポータル」 司会: André Porto Ancona •Daniel Pitti, Bogdan-Florin Popovici, William Stockting, Florence Clavaud「アーカイブズ記述に関する専門家グループ:中間報告」	分科会「情報へのアクセス」 司会: David Leitch •Emilie Gagnet Leumas, John J. Treanor「教区アーカイブズ:新しいモデルのための標準策定」 •Michael Häusler「児童保護制度とクライアントの記録へのアクセス提供。被害者の主張、プライバシー保護と歴史研究の均衡」 •Elisa Liberatori-Prati, April Miller「透明性文化の育成:政策策定と情報アクセス慣行の促進」 •Talei Masters, Aaron Braden, Jeremy Cauchi「木に竹を接ぐがごとし?」
	分科会「行動及びイニシアチブ」 司会: Teresa Cardellach •Lourdes Roca, Felipe Morales Leal「豊富なドキュメンタリー:研究目的での目録作成とアクセス」 •Enric Cobo i Barri, Fina Solà i Gasset「我々はスポーツをし、アーカイブする:スポーツクラブの記憶の回復」 •Maria Jesús Guridi Rivano, Carlos Hernán Maillet Aránguiz「19世紀のサンティアゴ。スマートフォンアプリを使ったバーチャルツアー」	分科会「写真その他」 司会: Laia Foix •Pilar Irala Hortal「写真遺産と新技術:ハロン・アンヘル資料と拡張現実」 •Zenaida Osorio「19世紀写真術における画像の創造と実物の再現法」 •Felipe Morales Leal, Lourdes Roca「研究、知識及び写真遺産。宮殿を写した映画と写真」 •Beatriz Martínez, Albert Bonnin「モノクロネガの現像と焼き増し」	分科会「写真その他」 司会: Marta Albà •Francesc Bonnín, María Sebastián「地質学者バルトメウ・ダルデル・イ・ペリカス(1894-1944)の写真及び文書のウェブによる普及とそのアクセシビリティ」 •Catalina Aguiló Ribas, Maria-Josep Mulet「ジュゼップ・トゥルヨル・イ・オテロ再考:1913-2013」 •Francesc Perramon Zapatero「『靴箱』、アーカイブズにおける自国の写真と記憶への理論的・方法的アプローチ」 •Natasha Christia, Ricard Martínez「考古学的視座:アーカイブと道路の歴史の写真化」	

10月15日(水)				
12:00-13:00	分科会「デジタル保存と保管のためのビジネスモデル」 司会: Joan A. Jiménez •Raul Rabionet, Joan Soler, Federico Gramage「試行経験:安全なファイルシステムの設計とタラサ市にとって真正な電子文書」 •Sina Westphal「ドイツ連邦公文書館デジタルアーカイブ:『マシンのリーダーダブル・データ』から『ポーンデジタル』記録へ」 •Alain Dubois, Tobias Wildi「文化省のデジタル保存戦略—ヴァレー州(スイス)の遺産の価値を最大化するウェブ上の保存法とは」	分科会「アーカイブズとウェブポータル」 司会: Miquel Tèrmens •André Porto Ancona, Darcinele Sena「PhotoArch: アーカイブズにおける写真的性質をもつ資料に関するバーチャル科学ネットワーク」 •Arantxa Rovira, Mari Luz Retuerta, Enric Cobo「オンラインでの教育: オンライン教材がもたらす教師とアーキビストの相乗効果」 •Joan Ferrer, Erika Serna, Anna Magrinyà「オンラインアーカイブズ: 移行期にあるカタルーニャ州アーカイブズポータルの現実」	分科会「行動及びイニシアチブ」 司会: Susanna Vela •Yvon Lemay, Anne Klein, Anne-Marie Lacombe「アーカイブズと創造: アーカイブズの視座」 •Ornella Rovetta「ベルギーのアーカイブズにおける国際犯罪裁判記録の処理: 何をデジタル化すべきか」 •Caterina del Vivo「イタリア・アーキビスト協会トスカナ支部の Archimeeting: 地域にアーカイブズを建設する10年の経験」	分科会「文化及びクリエイティブ産業とアーカイブズとの協働戦略」 司会: Mies Langelaar •William Maher「アーカイブズとクリエイティブ産業は共存できるのか?: アーカイブズにとっての時間的猶予の必要性」 •Sharon Alexander-Gooding, Tim Padfield「アーカイブズと遺産に一時の休息を: 図書館及びアーカイブズに有利な著作権の例外に関する提言」
	分科会「写真その他」 司会: M. Teresa Bermúdez •Martin R. Sandoval, Cecilia Vilches「19世紀の科学協会『アントニオ・アルサテ』の写真アーカイブズの再生」 •María Jesús López Portero「バルデモロ市立公文書館の写真フォンド: その普及計画」 •Esther Almarcha, Rafael Villena, Óscar Fernández「フリッカーを利用した機関が所蔵する写真の発信」 •Berenice Hernández, María Cristina Pérez「メキシコにおける写真コレクションの修復と発信」	分科会「写真その他」 司会: Lluís-Esteve Casellas •Jordi Serchs, Rafel Torrella (CAT)「理性としての街。バルセロナ市と写真。バルセロナ市のデジタル写真アーカイブ」 •Susanna Muriel Ortiz「ボンベイの写真。家族経営企業に眠るアーカイブズ・銀板写真」 •Ricard Martínez Teruel「画像のサイトとキャプションが変わった時にキャプチャされる写真」 •Miquel Àngel Pintanel Bassets「知識を怖れるのは誰か?カタルーニャ州フィルム図書館の遺産へのデータマイニングの適用」	/	
ワークショップ				
15:30-17:00	•Janet Foster「指導者の訓練」 •Justus Wamukoya, Patricia Stabbins「ICA-Req: デジタルオフィス環境における記録に関する原則と機能要件」	•Maria Teresa Natale, Sam Habibi, Barbara Dierickx「MOVIO: アーカイブズや文化機関によるデジタル展示の実行及び出版を支援するオープンソース・プラットフォームのツールキット」 (ヨーロッパのプロジェクト「アテナナラス」の枠内で開催のワークショップ) •Nachá Van Steen「ヨーロッパアナフォトグラフィの語彙」 (ヨーロッパのプロジェクト「ヨーロッパアナフォトグラフィ」の枠内で開催のワークショップ)	•Salvador Bramon, Miquel Casademont, Raimon Nualart, Miquel Serra「ジローナ大学におけるプラットフォームiARXIUを用いた電子文書のアーカイビングと保存」 •Bea Martínez「デジタル化処置における画像クオリティの評価」 (ヨーロッパ連合の「レオナルド・ダビンチ計画」の枠内で開催のワークショップ)	•Eléonore Alquier, Cécile Fabris「ツールキット『グッド・ガバナンスの鍵、アーカイビング』」
17:30-19:30	•Nancy McGovern, James Lowry「デジタル記録保存イニシアチブとは」 •Amela Silipa, Helen Walker「PARBICAグッド・ガバナンスのための適切な記録管理ツールキット」	/		